

19 世紀中頃における イギリスジョッキー・クラブと地方競馬 ——グッドウッド競馬場でのベンティンク卿改革を中心に——

鍵 谷 寛 佑

は じ め に

イギリスにおいて、「スポーツ・オブ・キングス (the Sport of Kings)」と称されるのが競馬である。従来、競馬は上流階級の独占物であり、まさに「貴族的」な娯楽であった。この競馬が、組織的に行われるようになったのは、1750 年ごろに上流階級の社交クラブとして、ジョッキー・クラブ (the Jockey Club) が設立されてからである。チャールズ 2 世以降の王族や貴族たちによって権威づけられていたニューマーケット (Newmarket) を本拠地とするジョッキー・クラブは⁽¹⁾、本来の「貴族的」な要素を強化すると同時に、統括団体としては一般を対象としたスポーツ化を図るようになった。特に、19 世紀に入り、競馬に他の階級の人々が参加するようになると、その二つの傾向はさらに促進され、19 世紀中頃には、競馬は「貴族的」かつ「近代的」なスポーツへと昇華する段階を迎えた。この時期の競馬場は、上流階級の華やかな社交空間として機能したし、それと同時に、他の階級の人々に合理的な娯楽を与えるための様々な改革がなされた。

こうしたジョッキー・クラブの改革の試みは、本拠地ニューマーケットや、ジョッキー・クラブが掌握したアスコット (Ascot)、エプソム (Epsom) といった他の中央の競馬場のみならず、その影響力をイギリス全土の地方競馬場へ及ぼそうとするものであった。中央の競馬場で創設されたクラシック・レー

ス (Classic Races) と類似する競走が、地方でも開催されるようになったこと、時代に適合させる競馬改革を示す合理的な競馬施行規則の拡大、これらによって広大なネットワークが構築されていった。ニューマーケットは、こうした改革の指導的役割を担う存在として、ますます聖地的な要素を見せるようになった⁽²⁾。

本稿では、ニューマーケットと地方競馬場の関係を検証したいが、そのために、地方競馬場でありながら、ニューマーケットの近代化の実験的競馬場として機能し、地方への影響力拡大のモデルケースと言える存在であったグッドウッド (Goodwood) 競馬場を中心に考察する。また、それは 19 世紀中頃を代表するジョッキー・クラブ幹事、ジョージ・ベンティンク卿 (Lord William George Frederick Cavendish-Scott-Bentinck, 1802–1848) 主導による改革を考察することでもある。彼は、公平性やエンターテインメント性を重視した、競馬を観客に「見せる」と同時に「魅せる」ための競馬改革を、まずグッドウッド競馬場で行っているからである。

ここで、競馬改革を促進させた要因として、他の階級の参入について追記しておきたい。19 世紀中頃になると、競馬は全階級的なスポーツと言われるほどに、上流階級だけの娯楽ではなくなった。上流階級にとっては、19 世紀に入っても、競馬に参加することは、社交の一環であり続け、加えて 19 世紀中頃には、他の階級に自らの威光を見せる機会にもなった。その際、上流階級の人々は、グランド・スタンド (Grand Stand) と呼ばれる特別観覧席に陣取ること、結束を強化するとともに、他の階級との身分的切り分けを行った。競馬を統括していた上流階級主体のジョッキー・クラブは、新しい参加者に合理的な娯楽を与えるために、競馬のスポーツとしての近代化を図る様々な改革を行った。また、それと同時に、中産階級の一部を取り込んで自らの再編を図るとともに、自らと他の階級との差異を明確化するために、競馬が本来持つ「貴族的」要素を強化する試みが推進されたのである。

一方、19 世紀以降富裕化した中産階級にとって、馬主として競馬に参加することは、社会的な上昇を示すステータス・シンボルを求めたものであり、加

えて上流階級との交流を企図したものであった。筆者が別稿で取り上げたように、19 世紀中頃に馬主登録を行っていた中産階級の人々は、馬主登録全体の約 7 割を占めていた⁽³⁾。また、同時期の労働者階級は、馬主として競馬に参加することは到底かなわなかったが、日々の労働の対価であるレクリエーションとして、頻繁に競馬場に足を運ぶようになった。

さて、ジョッキー・クラブ主導の下で、競馬が全階級的なスポーツとして統括されるにあたって、重要な役割を果たしたのが、メディアの利用である。クラブの設立から 20 数年を経た 1773 年に発行された *Racing Calendar* (『競馬年鑑』) が、それにあたる。この定期刊行物は、イギリス各地の競馬場の開催予定情報および競走結果を掲載するとともに、ジョッキー・クラブの競馬施行規則、命令などを他の競馬場に発信する際の重要な情報媒体となった。

加えて、ジョッキー・クラブは、18 世紀末にもう一つの重要な定期刊行物を発行し始めたが、それが 1793 年初版の *General Stud Book* (『血統登録書』) であり、この中で定義されたのが、サラブレッド (Thoroughbred) である。「純血」とされたこの新しい種の競走馬は、「高貴な」クラブメンバーを抱えるジョッキー・クラブによって創り出された。この種が、19 世紀前半を通して、馬主の血統意識をより高めることとなり、先の *Racing Calendar* における種牡馬広告と連動する形で、19 世紀中頃には血統の持つ意味合いがさらに強まった。「高貴な」ジョッキー・クラブが、競走馬の血統の枠組みを決めるということは、その競走馬を「高貴な」存在として位置付けることと同義であった。

1. 研 究 史

19 世紀末のジョッキー・クラブ研究者であるロバート・ブラック (Robert Black) は、彼の著作の中で、ジョッキー・クラブを以下の三期に分類している。それは、すなわち 1750 年から 1773 年までの第一期と 1773 年から 1835 年までの第二期、1835 年から 1891 年までの第三期である⁽⁴⁾。

1773 年は、情報発信の点で画期的な年で、先述のように『競馬年鑑』, *Racing Calendar* の初版が発刊された。1835 年は、*Racing Calendar* にジョッキー・クラブのメンバー全員が初めて公表された。それまでクラブのメンバーは非公開で、クラブはメンバーだけの社交クラブとして機能していた。しかし、後に紹介するヴァンプリューが述べているように、メンバーの公表はジョッキー・クラブの地方への影響力拡大を意図して行われた。最後の 1891 年は、ブラックの著作の出版年である。

ブラックの研究を踏まえ、筆者は、ジョッキー・クラブの設立から *Racing Calendar* の初版発行までをジョッキー・クラブの揺籃期とし、*Racing Calendar* の初版発行からクラブのメンバーリスト公開までを初期発展期、1830 年代半ばから 1840 年代半ばを後期発展期と位置付けている。特に、後期発展期は、本稿で取り上げるジョージ・ベンティンク卿時代にあたる。加えて、ベンティンク卿亡き後、クラブの舵取りを担ったアドミラル・ラウス (Admiral Henry John Rous, 1795–1877) の時代から 19 世紀末までを確立期としている。中でも 1877 年は、ジョッキー・クラブが作成した競馬施行規則が全国的に受容された年であるため、極めて重要である。

さて、ジョッキー・クラブ研究の二大潮流をなすのは、レイ・ヴァンプリュー (Wray Vamplew) とマイク・ハギンズ (Mike Huggins) の研究であろう。両者とも、19 世紀の競馬の発展について解き明かそうとしたが、ヴァンプリューは、特に 1840 年代における鉄道の発展が、見るスポーツとしての競馬人気を高めたことを強調している⁽⁵⁾。一方のハギンズは、スポーツの「商業化」のプロセスを捉えている⁽⁶⁾。ジョッキー・クラブに関して、ヴァンプリューは、それが 19 世紀に入って統括団体としての権力を求めようとしたと指摘し、地方競馬場を巻き込みながら、19 世紀中頃になっても攻勢を続けたと主張しているため⁽⁷⁾、肯定的に捉えている。スポーツの「商業化」に着目するハギンズは、ジョッキー・クラブを、多くの会員の能力不足と競馬への関心不足から消極的な団体であったとし、加えて、「賭け」、「2 歳馬競走」、「騎手の統制」、「競走馬のドーピング」という 4 つの重要問題への無関心からそ

の脆弱性を強調し、否定的な見方をしている⁽⁸⁾。

地方競馬への影響という点では、ジョッキー・クラブの統括団体としての権威が、いつイギリス全土に行きわたったかについての検討が必要であろうが、多くの研究は、その時期を 19 世紀中頃もしくは 19 世紀後半と定めている。つまり、ベンティンク卿時代あるいはラウス時代ということになるが、19 世紀中頃とする研究者には、ジョッキー・クラブがヴィクトリア朝時代に全国的な運営団体となったと主張するリチャード・ホルト (Richard Holt) や⁽⁹⁾、ジョッキー・クラブの影響力が 1840 年代に浸透したとするジョン・ベケット (John Beckett) らがいる⁽¹⁰⁾。これらの研究は、19 世紀中頃のベンティンク卿の改革を肯定的に捉えるものである。

一方で、19 世紀後半に重きを置く研究者として、ニール・トランター (Neil Tranter) は、社会秩序を堅固にせしめんとするエリートのもくろみの結果として、ヴィクトリア時代とエドワード時代にスポーツ革命があったことを指摘している⁽¹¹⁾。また、ピーター・マッキントッシュ (Peter McIntosh) は、19 世紀後半の特徴として、スポーツの増殖、有力な統括団体での組織化があったとし、その際にジョッキー・クラブが貴族の社交の集いから、ルール起草や執行の権限を持つ組織になったと位置づけている⁽¹²⁾。

地方への影響力という点での 19 世紀中頃か後半かの論争を述べてきたが、ここで取り上げたホルト、ベケット、トランター、そしてマッキントッシュの研究をさらに吟味してみると、ベンティンク卿時代かラウス時代かというよりも、地方への影響力に関して、19 世紀に重要な変化が二段階あったと理解した方がよい。本稿で扱うベンティンク卿時代もラウス時代も、地方への影響力を広げる中で重要な時代であったが、その重要性の違いが問われる。

さて、ベンティンク卿時代の背景について、彼が生きた 19 世紀のイギリスは、まさに「改良の時代」であった。政治的な出来事では、1832 年における第一回選挙法改正や 1834 年の改正救貧法の制定、またチャーティズムの敗北などを経験するとともに、1846 年には、自由貿易の確立に向けた穀物法廃止が実施された。

この改良の時代において、社会的に娯楽の必要性が声高に叫ばれていたが、この点については、ピーター・ベイリー（Peter Bailey）や川島昭夫氏の「合理的娯楽」（*rational recreation*）論が注目される。ベイリーは、1840 年代から 1850 年代にかけて、貴族的な統括団体であるジョッキー・クラブが自らの行いを正すことによって、競馬開催は愛国的要求および高い地位を持つ団体という点を利用した、貴族の後援およびライフスタイルの拠点であり続け、労働者階級の競馬への参加が増加したとしている⁽¹³⁾。これは、ベンティンク卿が、自らの時代において、上流階級を重視しながらも中産階級や労働者階級の娯楽を無視できなかったことを示している。また、川島昭夫氏は、フットボールを禁止されたダービー（Derby）の労働者階級に対して、伝統的農村競技、鉄道遊覧旅行、競馬という 3 つの代用の娯楽が提案され、そのうち競馬のみが実現をみたとし、競馬が「引き離しー引き寄せる」式のカウンター・アトラクションとして機能したことを指摘している⁽¹⁴⁾。

「合理的娯楽」に関しては、産業革命期のレジャーの研究で知られるヒュー・カニングム（Hugh Cunningham）も着目している⁽¹⁵⁾。このことは、産業革命によって台頭した中産階級を、19 世紀前半から中頃にかけて創立と発展を経験した公的美術館であるナショナル・ギャラリー（the National Gallery）を通して扱っている松本佐保氏の研究でも指摘されている⁽¹⁶⁾。時期的に、ベンティンク卿時代の余暇を説明するもので、「貴族的」かつ「近代的」な要素を融合させたベンティンク卿が、自らの改革で他の階級に合理的な娯楽を与えることを重視していた事実を示すのに役立つ。

次に、グッドウッド競馬場についてであるが、これまで多くの研究者に好意的に捉えられてきた。例えば、スポーツ史家のアレン・グットマン（Allen Guttman）は、19 世紀において、グッドウッド競馬場がアスコットやエプソムなどの有力競馬場にならび、他の大部分の競馬場よりも女性を多く惹きつけたとし、上流階級の社交における女性の競馬参加について述べた⁽¹⁷⁾。また、ジョン・ピンフォールド（John Pinfold）は、グッドウッド競馬場およびリヴァプール（Liverpool）競馬場を、本質的な貴族の後援を通じて確立された競

馬場と位置づけ、19 世紀の地方競馬場について論じている⁽¹⁸⁾。加えて、グッドウッドを芸術、建築、スポーツ、リッチモンド一族の観点から捉えた研究者に、ローズマリー・ベアード（Rosemary Baird）がいる⁽¹⁹⁾。この研究の中で提示される様々な芸術作品は、有力貴族の持つ富の大きさを改めて確認させてくれるとともに、当時のカントリー・ジェントルマンたちの社交場であった競馬場の風景を伝えてくれるものでもある。

次に、ベンティンク卿改革については、グッドウッドの厩舎調教師であったジョン・ケント（John Kent）の手による 1892 年出版の *Racing Life of Lord George Cavendish Bentinck, M. P. and Other Reminiscences* がある⁽²⁰⁾。当該競馬場関係者によるこの著作は先行研究でもあるが、史料価値も高く、本論文で取り上げるジョージ・ベンティンク卿の改革についての詳細な記述がある。また、ベンティンク卿は保護貿易論者として活躍したが、彼の死後、その生涯と政治的活動について著した人物として、かのベンジャミン・ディズレーリが挙げられる。ベンティンク卿の盟友であったディズレーリが執筆した *Lord George Bentinck : A Political Biography* の巻頭には「彼は英雄の遺産を遺した、それは偉大な名と模範としての示唆である」と書かれており⁽²¹⁾、ベンティンク卿の政治的活動を理解する上で、重要な書物であることを指摘しておきたい。

2. グッドウッド競馬場の開設と進展

グッドウッド競馬場は、チチェスター（Chichester）の北、サセックス・ダウンズ（Sussex Downs）にあり、ここでの最初の公式の競馬は、揺籃期からジョッキー・クラブのメンバーであった第 3 代リッチモンド公爵（3rd Duke of Richmond）の私有地で 1802 年に開催された。そして、ジョージ・ベンティンク卿とともに 19 世紀中頃における諸改革を実施したのが、彼の又甥で、ジョッキー・クラブのメンバーであった第 5 代リッチモンド公爵チャールズ・ゴードン・レノックス（Charles Gordon-Lennox, 5th Duke of Richmond,

1791-1860) である⁽²²⁾。

1802 年の *Racing Calendar* には、グッドウッド競馬の開催予定が掲載されている。この年の *Racing Calendar* には、グッドウッドを含めて、42 の競馬場の開催予定が掲載されていた⁽²³⁾。また、この年の *Racing Calendar* の定期購読者は、1,058 名であり、その内グッドウッド競馬場の地元サセックスでは 19 名であった⁽²⁴⁾。同じ年、例えばロンドンでは、163 名、ニューマーケットがあるサフォーク (Suffolk) は 23 名、エブソムがあるサリー (Surrey) は 41 名で、地方の代表的なヨーク (York) 競馬場があるヨークシャー (Yorkshire) では、62 名の購読者を数えていた⁽²⁵⁾。中央のニューマーケットを擁するサフォークが 23 名という点を考慮すれば、19 名は決して少ない数ではない⁽²⁶⁾。この数が、ベンティンク卿時代の 1846 年には、定期購読者数 1,308 名となり、先のそれぞれの内訳は、サセックス 34 名、ロンドン 261 名、サフォーク 37 名、サリー 43 名、そしてヨークシャーが 99 名であった⁽²⁷⁾。サセックスの定期購読者数は増加し、サフォークやサリーに匹敵しようかという成長を見せたことが理解できよう。

さて、グッドウッド競馬は、リッチモンド公爵家の土地で開催されたものであるため、当然ながらその影響下にあったが、彼らの貴族的ネットワークと、地元の有力者との密接な繋がりのもとで開催されたことに特色がある。ここで、再び *Racing Calendar* を紐解いてみよう。最初の 1802 年の *Racing Calendar* には、「グッドウッド競馬、1802 年 4 月 26 日月曜日開催予定」とあり、2 名の幹事の名前とともに、8 つの競走予定が記されている⁽²⁸⁾。その最初のレースが重視されるが、このレースに登録したのは 7 名で、注目すべきは、リッチモンド公爵やエグレモント伯爵 (Ld Egremont) の名前とともに、プリンス・オブ・ウェールズの名前が記されていることである⁽²⁹⁾。彼は、ジョッキー・クラブのメンバーであったといわれているが⁽³⁰⁾、後のジョージ 4 世である。記念すべき最初のレースに、王族や貴族が登録していることから、グッドウッドが王族や貴族の競馬場で、ジョッキー・クラブの手による競馬場であったことが、まずは理解される。

また、この競走には、**Mr.** としか称されない 4 名が登録している。そのうち、シェイクスピア氏 (**Mr. Shakespear**) とバインドロス氏 (**Mr. Byndloss**) は、1802 年の *Racing Calendar* 購読者一覧に、サセックスの購読者として名前があることから、グッドウッド競馬場がある地元の有力者である⁽³¹⁾。地方の競馬場では、有力者の庇護によって競馬が開催されることが通例であり、競馬史家ヴァンプリューも、グッドウッド競馬場を引合いに出している⁽³²⁾。王族や貴族に支えられ、なおかつ地域の有力者にも強力に支持されていたグッドウッドの様子は、その開催幹事を地元の名士であったリッチモンド公爵家のレノックス少将 (**Major-General Lenox**) が務めていたことから理解されよう⁽³³⁾。やがて、グッドウッドは、「壮麗な (*glorious*)」グッドウッドと呼ばれるイギリス社会における主要競馬場へと成長し、地方競馬のモデルとなっていくが、単なる一地方競馬場ではなく、貴族的ネットワークと地元のカントリー・ジェントルマンとの融和を図る理想的な競馬場として、ジョッキー・クラブが位置づけていたことがわかる。

次に、1802 年の *Racing Calendar* に掲載された開催予定競走についてだが、重要なことは、近代性を示すステークス競走が重視されていること、また貴族性を色濃く残すマッチ・レース (**Match Race**) も行われている点である。先の最初のレースは、登録料 10 ギニー、距離 3 マイルのスウィープステークス (**Sweepstakes**) であった⁽³⁴⁾。これは、勝ち馬の馬主が、全出走馬の馬主から集まった登録料を総取りする競走のことである。従来、競馬は「長時間、長距離、少頭数」で行われるのが基本であったが、18 世紀後半に入り、ジョッキー・クラブが先頭に立って近代競馬を確立していくにあたって、「短時間、短距離、多頭数」の競走形態が目立つようになった。その際、重宝されたのがこのステークス競走で、18 世紀末から創設され始める 3 歳馬のみによるクラシック・レースもこのステークス競走の一種である⁽³⁵⁾。

この他、初年度のグッドウッド競馬では、他のスウィープステークスが 1 レース、優勝馬にプレート (**Plate**) が贈られるプレート競走が 6 レース、*Racing Calendar* 上で開催予定競走として掲載されていた⁽³⁶⁾。地域色を示す

ものとして、これらのプレート競走のうち、2 つにシティ・オブ・チチェスター (the City of Chichester) の名前がみられることが特筆される⁽³⁷⁾。地域の協賛のもとで競馬が開催されていたことが分かり、地域密着型の競馬であったことの証左である。

また、*Racing Calendar* には掲載されていなかったが、1802 年のグッドウッド競馬では、マッチ・レースが 6 レース行われていたことが分かっている⁽³⁸⁾。マッチ・レースは、1 対 1 で行われる馬主の威信を示すと同時に所有馬の「高貴さ」をも示す、極めて貴族的な競走形態のことである。ジョッキー・クラブの本拠地ニューマーケットでは、19 世紀前半を通じてこの種の競走が重視されていたが、最初期のグッドウッド競馬は、ニューマーケットのように従来の貴族的要素を多分に遺していたといえる。

次の表 1 は、1847 年の競走についてまとめたものである。この表の詳細は後述するが、ここでは 1847 年になっても貴族的要素が重視されていることを指摘しておきたい。特に、強調しておきたいレースは、第 7 レースのグッドウッド・クラブ・ステークス (Goodwood Club Stakes) で、クラブのメンバーしか騎乗することのできない特殊な競走の存在は、従来の貴族らしい競馬がこの時代にも重宝されていた事実を物語る。また、第 8 レースのウェルター・ステークス (Welter Stakes) もジェントルマン騎乗によるレースで、同様の指摘ができるであろう。

さて、グッドウッド競馬場の知名度を大きく押し上げるきっかけとなった出来事に、メインレースであるグッドウッド・カップ (the Goodwood Cup) の創設とその後の発展がある。これは、3 歳馬以上が参加する競走で、3 歳馬に限定されたクラシック・レースとはその質を異にするものであるが、競馬に求められる興奮、感動といった諸要素や開催要領としては、クラシック・レースに準ずる性格を持つものであった。この競走は、1812 年に創設された。当初の名前はゴールド・カップ (Gold Cup) であったが⁽³⁹⁾、1837 年から正式にグッドウッドの名を冠するようになった⁽⁴⁰⁾。この時期は、後述するペンティンク卿時代とまさに合致している。1814 年からは、より良い天候の下で競馬

表 1 1847 年 7 月 27 日 (火) グッドウッド競馬初日の競走予定表

競走名	距離	登録料	出走条件	設定斤量	特殊条件	出走登録頭数
1 Craven Stakes	1.25 マイル (約 2000 m)	10 sov.	全馬齢の牡馬, 牝馬	3 歳馬 7 ストーン (約 44.45 kg) 4 歳馬 8 ストーン 4 ポンド (約 52.6 kg) 5 歳馬 8 ストーン 10 ポンド (約 55.3 kg) 6 歳馬以上 8 ストーン 12 ポンド (約 56.2 kg)	なし	競走前日午後 7 時まで受付
2 Lavant Stakes	0.5 マイル (約 800 m)	50 sov.	2 歳牡馬, 牝馬	2 歳牡馬 8 ストーン 7 ポンド (約 54 kg) 2 歳牝馬 8 ストーン 3 ポンド (約 52.2 kg)	ニューマーケットの July Stakes, Chesterfield Stakes の勝ち馬, アスコットの 2 歳ステークスの勝ち馬は、追加斤量 5 ポンド (約 2.27 kg)	14 頭
3 Sweepstakes	キングス・ プレーアコース 約 3 マイル 5/8 ポン (約 5800 m)	300 sov.	4 歳牡馬, 牝馬	4 歳牡馬 8 ストーン 7 ポンド (約 54 kg) 4 歳牝馬 8 ストーン 2 ポンド (約 51.7 kg)	なし	17 頭
4 Gratwicke Stakes	1.5 マイル (約 2400 m)	100 sov.	1843 年に交配された 繁殖牝馬の生産馬 (3 歳牡馬, 牝馬)	牡馬 8 ストーン 10 ポンド (約 55.3 kg) 牝馬 8 ストーン 5 ポンド (約 53.1 kg)	100 ポンドの勝ち馬を出していない種牡馬、繁殖牝馬による生産馬は減量 3 ポンド (約 1.36 kg)、両親ともなら減量 6 ポンド (約 2.72 kg)	50 頭 (うち 5 頭死亡)
5 Ham Stakes	2 歳コース	100 sov.	1844 年に交配され た繁殖牝馬の生産馬 (2 歳牡馬, 牝馬)	牡馬 8 ストーン 10 ポンド (約 55.3 kg) 牝馬 8 ストーン 7 ポンド (約 54 kg)	100 ポンドの勝ち馬を出していない種牡馬、繁殖牝馬による生産馬は減量 3 ポンド (約 1.36 kg)、両親ともなら減量 6 ポンド (約 2.72 kg)	43 頭 (うち 4 頭死亡)
6 Drawing Room Stakes	Drawing Room Stakes コース一周	25 sov.	3 歳馬	牡馬 8 ストーン 7 ポンド (約 54 kg) 牝馬 8 ストーン 2 ポンド (約 51.7 kg)	ダービー、オークスの勝ち馬は追加斤量 8 ポンド (約 3.63 kg)、2 着馬は追加斤量 4 ポンド (約 1.81 kg)	30 頭
7 Goodwood Club Stakes	Craven Stakes コース	10 sov.	3 歳馬以上	最低 9 ストーン (約 57.2 kg)	グッドウッド・クラブのメンバー騎乗によるレース	1847 年グッドウッド競馬開催の前週の月曜日までに、ロンドンのウェザビー氏の事務所に名前を送る ジョージ・ベンボ、ケンク卿、リッチモンド公爵の二人が登録済
8 Welter Stakes	Craven Stakes コース	20 sov.	全馬齢の牡馬, 牝馬	3 歳馬 10 ストーン 12 ポンド (約 68.95 kg) 4 歳馬 12 ストーン 4 ポンド (約 78 kg) 5 歳馬 12 ストーン 12 ポンド (約 81.65 kg) 6 歳馬以上 13 ストーン (約 82.56 kg)	Anglessey ステークスの規約によるジョーエントルマン騎手騎乗	1847 年グッドウッド競馬開催の前週の月曜日までに、ロンドンのウェザビー氏の事務所に名前を送る

出典: *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.75, 1847, pp.108-115 より筆者作成

を楽しむために、グッドウッド競馬の開催自体が、第 4 代リッチモンド公爵のイングランドへの帰国に伴い、当初の 4 月ないし 5 月から 7 月下旬に移されたが⁽⁴¹⁾、エンターテインメント性が盛り込まれたグッドウッド競馬の名声は高まっていった。

では、1814 年のゴールド・カップ（以後グッドウッド・カップと記す）について、同年発行の *Racing Calendar* 誌上に掲載されたその競走形態を確認してみる。この競走は、登録料 10 ギニー、賞金 100 ギニーで、競走距離 3 マイル（4,800 m）、加えて 10 名の登録がなければ不成立との記載があった⁽⁴²⁾。*Racing Calendar* 発行時、この競走に登録していたのは、エグレモント伯爵、ワイト氏（Mr. Whyte）、サー・ジョン・コープ（Sir John Cope）、ジョリフ氏（Mr. Jolliffe）、ロー氏（Mr. Law）の 5 名であった⁽⁴³⁾。このままであれば、競走は不成立になっていたところであったが、実際には、12 名の登録があり、ブレイク氏（Mr. Blake）のバンクォー（Banquo）が勝利を収めた⁽⁴⁴⁾。規定以上の参加者を集めたということは、この競走が当初から馬主たちに注目されていたことを示している。

ゴールド・カップという名称の競走は、グッドウッド競馬場以外でも行われていたが、1807 年に創設されたアスコット競馬場のものが、特に著名である。ここで再び 1814 年に焦点を当てると、この年の *Racing Calendar* に掲載された 55 競馬場のうち、ゴールド・カップが行なわれていたのは、グッドウッドを含めて 28 競馬場で、全体の半数以上を占めていたことがわかる⁽⁴⁵⁾。この年のグッドウッド・カップとダービーやオークスといったクラシック・レースが開催されていたエプソム競馬場での同年開催予定のゴールド・カップとを比較すれば、エプソムのゴールド・カップの競走距離が 2 マイル（約 3,200 m）と、グッドウッド・カップが 1 マイル長い。競走距離を除く他の競走基準は全く同じであり⁽⁴⁶⁾、これを考慮すれば、グッドウッド・カップは極めて中央的基準で創設されたことも理解される。

その後、1847 年になると、同年の *Racing Calendar* に掲載された 56 競馬場のうち、明確にゴールド・カップの名が付いた競走が行なわれた競馬場は

15 競馬場で、グッドウッド・カップのように、競馬場名や地域名を冠したゴールド・カップと思われる競走が行なわれた競馬場は 9 ヶ所あった⁽⁴⁷⁾。1814 年に比べ、その割合は減少しているが、グッドウッド・カップのように、独自の名前を冠する競走が誕生したことは、そうした競馬場が大きな発展を経験したためであると言って差し支えないであろう。

ここで、グッドウッド競馬場の 1814 年以降の発展について見ておきたいが、1819 年には、グッドウッド競馬の開催は 8 月中旬に変更され、1825 年には、開催における賞金総額が 1,057 ポンドとなり、開催初年度以来 1,000 ポンドを超え、過去最高額を記録した⁽⁴⁸⁾。それ以降、賞金総額は飛躍的上昇を遂げた。事実、1831 年には初めて 5,000 ポンドを突破し、1837 年には初めて 10,000 ポンドの大台を超えた⁽⁴⁹⁾。開催における賞金が増えたということは、それだけ多くの参加者を集めたということと同義である。実際、スウィープステークスに代表されるステークス競走の賞金は、登録馬数に比例するものであり、この時期に劇的増加を見せている。

加えて、1830 年代において、グッドウッド競馬は、「著名な (celebrated)」競馬として認知されている⁽⁵⁰⁾。同時に、権威のあったスポーツィング・マガジン (*Sporting Magazine*, 1792 年創刊) 内で言及されているように、グッドウッド競馬は、よく知られており、まさに賞賛に値する成果で、高い権威を持つとも指摘されている⁽⁵¹⁾。そのため、グッドウッド競馬がその揺籃期を脱し、新たな発展段階に入ったのは、1830 年代であると言える。また、当時のジョッキー・クラブメンバーで、ペンティンク卿のいとこであったチャールズ・グレヴィル (Charles Greville) は、上流階級の競馬生活について、「1834 年 8 月 5 日、競馬のためにグッドウッドへ。途中で一晚ペットワース (Petworth) へ行った。スタンリー (Stanley) は、グッドウッドで、競馬、ビリヤード、その他そのようなものに熱中していた」と日記の中で回顧している⁽⁵²⁾。この記述に登場するスタンリーとは、後の第 14 代ダービー伯爵 (Edward Geoffrey Smith-Stanley, 14 th Earl of Derby, 1799–1869) のことであり、彼もジョッキー・クラブの主要メンバーであった。実際にジョッキー・クラブのメンバー

が、当時のグッドウッド競馬場に頻繁に足を運んでいた事実をうかがい知ることができる。

さて、この頃になると、ジョッキー・クラブは以前にも増してスポーツ統括団体としての「近代的」側面を見せ始めていた。このことは、1828 年 10 月 29 日の、ニューマーケットのニュー・ルーム (New Room) における新しい競馬施行規則制定に如実に現れている⁽⁵³⁾。加えて、1832 年にはジョッキー・クラブの競馬施行規則を採用しない競馬場からの紛争解決依頼を一切受け付けないうと、*Racing Calendar* で発表した⁽⁵⁴⁾。これは、まさに他の競馬場に対する圧力であった。

こうした圧力は、1807 年、*Racing Calendar* に、ジョッキー・クラブによってすでに解決された「判例集」の掲載が開始されたことに始まる。ヴァンプリューによれば、これは地方の競馬場開催幹事に対する手引きとして行われたようである⁽⁵⁵⁾。また、1816 年には、ジョッキー・クラブの幹事たちが、「論争中の問題をジョッキー・クラブの幹事たちの判決に委ねたいと思う人は、一定の条件が守られる限り自由にそうしてよい」という通知を *Racing Calendar* に発表した⁽⁵⁶⁾。一定の条件とは、論争中の問題が競馬に関するものであること、文書でその事件の申し立てを行うこと、ジョッキー・クラブの幹事たちの判決を遵守することなどであったが、この時期に初めて、ジョッキー・クラブは他の競馬場からの要求があった場合、その仲裁をすることを進んで申し出たのである⁽⁵⁷⁾。そのため、1816 年以降のジョッキー・クラブは、従来よりも具体的な形で、グッドウッドでの規則改革を含めて、他の競馬場に影響力を及ぼしていくことになる。

3. ジョージ・ベンティンク卿の改革

1836 年から、ジョッキー・クラブの幹事としてその手腕を発揮したジョージ・ベンティンク卿は、グッドウッド競馬場を舞台に改革を始めたが、それらは、スポーツにおける近代的要素である公平性の確保とエンターテインメント性

の充実などである。具体的には、違反者の嚴重な処罰、グランド・スタンドの整備、馬運車の導入、出走馬の口腔検査、公平な斤量の設定などが挙げられる。

1840 年代のグッドウッド競馬場における違反者への嚴重な処罰の実施に関して述べるには、まずジョージ・ベンティンク卿と協力関係にあった第 5 代リッチモンド公爵についての言及から始めなければならない。第 5 代リッチモンド公爵は、1845 年の第 2 回 10 月開催の火曜日に、ニューマーケットで開かれたジョッキー・クラブの会議において、次のような称賛を受けている⁽⁵⁸⁾。「ジョッキー・クラブの満場一致の感謝が、リッチモンド公爵閣下の貴族院における根気強い尽力と優れた貢献に対して示された、競馬場の最大の利益に対して破壊の恐れがある多くの古臭い制定法が廃止されたので、競馬に関する現存の法が、安全かつ満足な地位にある」と。

これは、幹事であったベンティンク卿のリッチモンド公爵への賛辞とも言えるが、一体彼らはどのような変革を競馬にもたらそうとしていたのであろうか。リッチモンド公爵が管理し、ベンティンク卿が改革を行ったグッドウッド競馬場に目を転じることにする。

1847 年版 *Racing Calendar* は、掲載量が増え、初めて分冊化が行われた版であるが、グッドウッド競馬場の開催予定には、初めに以下の警告が記されている。

リッチモンド公爵閣下は、違法行為の罪を犯した人物、また、賞金、違約金や競馬で負けた賭け金の支払い不履行で悪名高い人物は、グッドウッドにおける全競馬開催の間、グランド・スタンドやその特定観覧席、サセックスでの彼の所有地に入場を許されないこと、そして、もしそのような人物が入場するならば、リッチモンド公爵閣下、その時の幹事、もしくは競馬場事務員に存在を指摘され、追い出されるであろうことを警告する⁽⁵⁹⁾。

違法行為に関するこの警告に続いて、競馬場に「今年現れるなら、起訴される」とも記されている⁽⁶⁰⁾。こうした債務不履行者などの違反者に対する徹底的な締め出しは、ジョージ・ベンティンク卿が着手した、競馬のスポーツ化の一つ、すなわち公平性を確保するための重要な改革であった。

さて、ジョッキー・クラブの幹事を務めたベンティンク卿は、すべての階級の観客に適切な便宜を与えることに対する商業的利点を認識した最初の幹事でもあった⁽⁶¹⁾。彼は、若い頃から競馬に興味を持っており、22歳の時、グッドウッドで行われたコックド・ハット・ステークス（the Cocked-Hat Stakes）に自ら騎乗し、勝利を収めているが⁽⁶²⁾、それはまさに中世の騎士さながらで、競馬の貴族的伝統をこよなく愛する人物であった。その一方で、ベンティンク卿は、リッチモンド公爵とともに幾多の改革を行うことで、グッドウッド競馬場を競馬の最先端にし、今日知られている競走管理の基礎を築いた⁽⁶³⁾。例えば、それぞれの競走におけるスタートの際の時間厳守を競馬場係員に求め、発走予定時刻に遅れた場合、毎分10シリングの罰金を科す制度を確立したし、速報掲示板の導入や適切な騎手服の着用、定められた場所での装鞍や、競走馬のグランド・スタンド前での歩行および駆け足（「返し馬」）、スタートに伴う旗での補助などを導入した⁽⁶⁴⁾。

これらはすべて、競馬をエンターテインメントとして確立していくにあたって必要不可欠な要素であった。グッドウッド競馬場において厳密な競馬開催を行うことで、その開催の公平性を示し、同時に自らをアピールする場として、競馬場を機能させたのが、ジョージ・ベンティンク卿の功績であった。後に、これらの改革がニューマーケットを含めたイギリスの中央競馬場のみならず、地方競馬場、さらには世界中で導入され、グローバル・スタンダードとなっていく。

加えて、上流階級をアピールする場となったのが、特別観覧席であるグランド・スタンドである。グッドウッド競馬場では、1842年に新しいグランド・スタンドが完成したが、当時の *The Illustrated London News* の中で、「グッドウッド競馬は、その週のスポーツ・アトラクションで、例年の式典であり、

すばらしいイギリス紳士リッチモンド公爵の嗜好，進取の気性，寛容さのおかげで，今や王国の最も優れた競馬娯楽を供給している」という賛辞を贈られ，スタンドの華やかな様子が伝えられていた⁽⁶⁵⁾。先のペンティンク卿の改革，すなわち，発走遅延の罰金制度や，速報掲示板，適切な騎手服，装鞍場所，「返し馬」などの導入は，グランド・スタンドの観客の楽しみおよび賭けをより促進するためのものであったので⁽⁶⁶⁾，それぞれが密接に関係しあっていたと言える。

この他にも，1836 年にペンティンク卿がエリス（Elis）でセントレジャーを勝った時には，史上初めて競走馬が調教厩舎から競馬場まで運搬車で運ばれるという偉大な業績があった⁽⁶⁷⁾。この功績も，グッドウッドで発案されたものである⁽⁶⁸⁾。当時，競走馬の輸送手段はまだ確立されておらず，厩舎から遠く離れた他の競馬場まで移動するには，競走馬自身の脚で，時には数日をかけて移動しなければならなかった。このことを考えると，彼の馬運車の考案は，既存の概念を覆す画期的なものであり，彼が活動拠点としたグッドウッド競馬場と他の競馬場間の移動を容易にし，かつ馬の負担を軽減することを企図していたと指摘できる。この点から，ペンティンク卿は，公平性とエンターテイメント性の両方において，競馬のスポーツ化に貢献した人物であったと言える。

さて，グッドウッド競馬の 1847 年の開催にあたり，先ほどのリッチモンド公爵の警告の他に，以下のような警告もある。

公称の年齢が疑われる馬は，幹事によって任命された適任者による口腔の事前検査なしに出走を認められない，もし競走後まで反対されなければ，同種の検査が強く要求される。そして，馬主，調教師，馬の世話を託された他の人物によって，そうした検査に対する抵抗があった場合には，その賞金と競走は二着馬に与えられ，関係した連中は，グッドウッド競馬で永久に馬を走らせること，出席することから除外されるだろう⁽⁶⁹⁾。

この出走馬の口腔検査は，年齢詐称が行われていないかを判断する重要な検

査であったので、これもまた公平性を追求するものであるが、これに関して、「異議は、幹事の一人かウエザビー（Weatherby）氏に書面でなされなければならない」と続いている⁽⁷⁰⁾。リッチモンド公爵とベンティンク卿の協力関係および彼らがジョッキー・クラブのメンバーであったという事実から、ジョッキー・クラブとグッドウッド競馬場との繋がりを指摘できる。さらに、競走予定の終わりには「すべてのニューマーケットにおける規約は、グッドウッドにおいて固守される」とあり⁽⁷¹⁾、ニューマーケットと地方競馬場のモデルであったグッドウッドとの関係を *Racing Calendar* に明示したことは特筆され、他の地方競馬場への強制が際立ったことを示している。

特に、公平性とエンターテインメント性という点においては、斤量の改革がもっとも重要な改革と言えるかもしれない。斤量とは、競走馬に課される騎手を含めた負担重量である。競走に面白みを持たせ、さらに興奮や感動を引き起こすためには、出走する競走馬の馬齢や性別を考慮した上で、この斤量を決めねばならない。これが偏ってしまうと、出走馬に有利不利が出てしまい、競走が公平性に欠け、エンターテインメント性においてもつまらないものになってしまうからだ。

19 世紀中頃におけるグッドウッド競馬の改革の進展を見るために、先に挙げた 1802 年のシティ・オブ・チチェスター協賛のプレート競走の一つを見てみると、3 歳馬以上に参加資格があったが、その斤量は 3 歳馬 6 ストーン（約 38.1 kg）、4 歳馬 7 ストーン 7 ポンド（約 47.6 kg）、5 歳馬 8 ストーン 5 ポンド（約 53.1 kg）、6 歳馬 8 ストーン 10 ポンド（約 55.3 kg）、7 歳馬以上 8 ストーン 12 ポンド（約 56.2 kg）とばらつきが極めて激しく、牡馬と牝馬間に生じる性差も考慮されていないことがわかる⁽⁷²⁾。シティ・オブ・チチェスター協賛のもう一つのプレート競走は、3 歳馬と 4 歳馬によって行われたが、3 歳馬の斤量が 7 ストーン 5 ポンド（約 46.7 kg）、4 歳馬の斤量が 8 ストーン 8 ポンド（約 54.4 kg）と、わずか 1 歳の違いで約 8 kg もの差があり、やはり牡牝間の性差は考慮されておらず⁽⁷³⁾、不十分さがあったといえる。

7 月下旬に開催が移った 1814 年のグッドウッド競馬において、注目すべき

点は、先のグッドウッド・カップとの関連性がみられる競走が存在していることである。その競走は 3 歳以上で行われ、斤量は 3 歳馬 6 ストーン 9 ポンド (約 42.2 kg)、4 歳馬 8 ストーン 1 ポンド (約 51.3 kg)、5 歳馬 8 ストーン 10 ポンド (約 55.3 kg)、6 歳上 9 ストーン 2 ポンド (約 58.1 kg)、牝馬とセン馬 (去勢された馬) は 3 ポンド (約 1.36 kg) 減量というものであったが、この競走には、グッドウッド・カップの勝ち馬は 7 ポンド (約 3.18 kg) 追加される旨が記されていた⁽⁷⁴⁾。こうした、競走間に関連性を持たせることも、競馬開催においては重要で、公平性やエンターテインメント性の充実に繋がるものであったことは、容易に想像がつく。

そして、ペンティンク卿時代における先の表 1 を見てみると、各競走に細かな斤量設定がなされていることがわかる。第 2 レースには、ニューマーケットのジュライ・ステークス (July Stakes)、チェスタフィールド・ステークス (Chesterfield Stakes) の勝ち馬に追加斤量 5 ポンド (約 2.27 kg) を課す 2 歳馬競走のラヴァント・ステークス (Lavant Stakes) が予定されていたし、第 6 レースには、クラシック・レースであるダービー、オークスの勝ち馬に追加斤量 8 ポンド (約 3.63 kg)、2 着馬に追加斤量 4 ポンド (約 1.81 kg) が課されるドロウイング・ルーム・ステークス (Drawing Room Stakes) が設けられていた。また、第 4、5 レースのように、競走馬の出自すなわち血統背景を考慮した特殊条件が設定されるなど、それまでの時代と比べてペンティンク卿時代には大きな進歩が見られた。事実、ペンティンク卿は、より効果的な騎手の検量に対する鋭敏も持ち合わせていたため⁽⁷⁵⁾、特に斤量の設定に大きな関心を寄せていたことは間違いなく、改革の結果、より公平な競走が行われたと言える。

最後に、表 1 の補足をしておこう。19 世紀半ばになると、その競走形態は多種多様なものへと変貌を遂げていた。例えば、明確に示されている距離だけでも、0.5 マイル (約 800 m) から約 3 マイル 5 ハロン (約 5,800 m) と大きなばらつきが見られる上に、2 歳馬競走の他に 3 歳馬競走、4 歳馬競走や全馬齢が出走可能な競走まで設定されている。先に指摘したように、それぞれの競

走によって、斤量や必要な登録料が細かく定められ、特殊条件付きの競走も見受けられる。これは、ベンティンク卿の改革によって、競馬が公平性とエンターテインメント性を持つ「合理的娯楽」に昇華され、近代スポーツとしての性格を極めて色濃く持つようになった証拠であると指摘できる。加えて、先に指摘した第 7, 8 レースのように、貴族的要素が重視されていることも特筆でき、ベンティンク卿時代、まさに「貴族的」かつ「近代的」な競馬が行なわれていたと言えよう。

お わ り に

本稿では、イギリス地方競馬場の代表的存在として、特にジョッキー・クラブと繋がり深かったグッドウッド競馬場を取り上げた。ジョッキー・クラブは 19 世紀前半を通して、その影響力を着実に他の競馬場へ拡大していった。「判例集」の掲載開始や、1828 年における新競馬施行規則の制定および、それを採用しない競馬場からの紛争解決依頼の拒否などである。そして、1830 年代から 1840 年代にかけて、当時ジョッキー・クラブの幹事を務めていたジョージ・ベンティンク卿が、近代競馬に不可欠な要素を盛り込んだ様々な改革をグッドウッド競馬場で行ったこと、すなわち、彼の「貴族的」かつ「近代的」要素を融合させた競馬の形態が、ジョッキー・クラブのネットワークを通して、全国へ浸透することを指摘した。

今後の課題として、19 世紀後半にも目を向け、特にアドミラル・ラウスの時代を取り上げる作業が残されている。これに着手することで、ジョッキー・クラブの権威がイギリス全土に行きわたったのは、19 世紀中頃か 19 世紀後半かという議論に対して、19 世紀を通しての権威の浸透には、大きな変化が二度あったことを、より具体的に示すことができるであろう。

加えて、筆者はこれまで、上流階級と中産階級の競馬参加に焦点を当ててきたが、イギリス競馬の全体像を提示するには、労働者階級の競馬参加について、「賭け」の問題などから、重点的に取り上げなければならないだろう。こ

れらに関しては、別稿で論じることとしたい。

註

- (1) Peter Edwards, *Horse and Man in Early Modern England* (London, 2007), p.114.
- (2) ヴィクトリア朝を代表する小説家アンソニー・トロロープ (Anthony Trollope) は、ニューマーケットを「マホメットの信奉者たちが、メッカのミナレットの方向に目を向ける際に表すのと同様に、すべての真の競馬愛好者が、忠誠を持って誓いを立てる聖地である」と記した。Anthony Trollope, *British Sports and Pastimes, 1868* (London, 1868), p.64.
- (3) 鍵谷寛佑「19 世紀中頃におけるイギリス上流階級の社交空間－ジョッキー・クラブに見る競馬のスポーツ化を中心に－」『関学西洋史論集』第 34 号, 2011 年, 45 頁。
- (4) Robert Black, *The Jockey Club and Its Founders: In Three Periods* (London, 1891).
- (5) Wray Vamplew, *The Turf: A Social and Economic History of Horse Racing* (London, 1976).
- (6) Mike Huggins, *Flat Racing and British Society, 1790–1914: A Social and Economic History* (London, 2000).
- (7) Wray Vamplew, *op.cit.*, Ch.6.
- (8) Mike Huggins, *op.cit.*, p.185.
- (9) Richard Holt, *Sports and the British: A Modern History* (Oxford, 1989), p.29.
- (10) John V. Beckett, *The Aristocracy in England, 1660–1914* (Oxford, 1986), p.359.
- (11) Neil Tranter, *Sport, Economy and Society in Britain, 1750 – 1914* (Cambridge, 1998).
- (12) Peter McIntosh, *Sport in Society* (Toronto, 1987).
- (13) Peter Bailey, *Leisure and Class in Victorian England: Rational Recreation and the Contest for Control, 1830–1885* (London, 1978), p.23.
- (14) 川島昭夫「十九世紀イギリスの都市と「合理的娯楽」」, 中村賢二郎編『都市の社会史』ミネルヴァ書房, 1983 年, 304–305 頁。
- (15) Hugh Cunningham, *Leisure in the Industrial Revolution* (London, 1980).
- (16) 松本佐保「「上品な」公共圏－ロンドン・ナショナル・ギャラリーにおけるイタリヤ・ルネサンス絵画コレクションを中心に－」, 大野誠編『近代イギリスと公共圏』昭和堂, 2009 年, 194 頁。

- (17) Allen Guttman, 'English Sports Spectators : The Restoration to the Early Nineteenth Century', *Journal of Sport History*, Vol.12, No.2, 1985, p.111.
- (18) John Pinfold, 'Horse Racing and the Upper Classes in the Nineteenth Century', *Sport in History*, Vol.28, No.3, 2008, p.415.
- (19) Rosemary Baird, *Goodwood : Art and Architecture, Sport and Family* (London, 2007).
- (20) John Kent, *Racing Life of Lord George Cavendish Bentinck, M. P. and Other Reminiscences* (London, 1892).
- (21) Benjamin Disraeli, *Lord George Bentinck : A Political Biography* (London, 1852).
- (22) David Oldrey, *The Jockey Club Rooms : A Catalogue and History of the Collection* (London, 2006), p.107.
- (23) *Racing Calendar*, Vol.29, 1802, pp.201-303.
- (24) *Ibid.*, pp.vii-xxv.
- (25) *Ibid.*, pp.xvi-xix, xxi-xxiv.
- (26) 定期購読の他にも、ヨーク、ニューカッスル・アポン・タイン (Newcastle-upon-Tyne), マンチェスター (Manchester), リヴァプール, バース (Bath) そして、ニューマーケットにおいて、10 シリング 6 ペンスで一般販売されていたことが、1802 年発行の *Racing Calendar* の巻頭広告欄からわかる。一般販売の正式な数を把握することは出来ないが、少なくとも、定期購読者の多くの人々の目に新しく登場したグッドウッド競馬場の開催予定が留まったことであろう。
- (27) *Racing Calendar*, Vol.74, 1846, pp.vii-xxiv.
- (28) *Racing Calendar*, Vol.29, 1802, pp.262-264.
- (29) *Ibid.*, p.262.
- (30) Robert Black, *The Jockey Club and Its Founders : In Three Periods*, pp.171-172.
- (31) *Racing Calendar*, Vol.29, 1802, p.xxii, 262. 彼らは、共にエスクワイアであった。
- (32) Wray Vamplew, *op.cit.*, pp.25-26.
- (33) *Racing Calendar*, Vol.29, 1802, p.262. 1802 年の段階で、開催幹事は 2 名おり、もう一人はゲイジ氏 (Hon. J. Gage) であった。ゲイジ氏には、「Honourable」という敬称が付されていた。*Racing Calendar* の購読者一覧の最初には、王族や貴族といった身分の高い人々が、「His Royal Highness」, 「His Grace」, 「Right Honourable」, 「Honourable」といった敬称付で掲載されていた。そして、彼らの後に、アルファベット順で地域別に、いわば一般の人々が掲載されるという形が採られていた。それだけ、敬称の付く人々が、高貴な存在として特別な扱いを

受けていたのである。ゲイジ氏の名前は定期購読者一覧にはないが、同じ *Racing Calendar* 上で「Honourable」として扱われているということは、特別な人物であったと言える。特に、19 世紀中頃における *Racing Calendar* 上の敬称付き定期購読者に関しては、鍵谷「19 世紀中頃におけるイギリス上流階級の社交空間－ジョッキー・クラブに見る競馬のスポーツ化を中心に－」、39-58 頁を参照のこと。また、こうした敬称の一般的区分に関しては、Peter Laslett, *The World We Have Lost* (New York, 1965) を参照のこと。

- (34) *Racing Calendar*, Vol.29, 1802, p.262. この競走では、エグレメント伯爵所有の栗毛馬ボブテイル (Bobtail) が勝ち馬となり、70 ギニーを総取りした。William H. Mason, *Goodwood : Its House Park and Grounds with a Catalogue Raisonne of the Pictures* (London, 1839), p.185.
- (35) クラシック・レースとは、ドンカスター競馬場で行われるセントレジャー (St. Leger, 1776 年創設)、エプソム競馬場で行われるオークス (Oaks, 1779 年創設、牝馬限定戦) とダービー (Derby, 1780 年創設)、ニューマーケット競馬場で行われる 2000 ギニー (Two Thousand Guineas, 1809 年創設) と 1000 ギニー (One Thousand Guineas, 1814 年創設、牝馬限定戦) の 5 つを指す。ジョッキー・クラブは、自らの本拠地であるニューマーケットで行われる 2000 ギニーと 1000 ギニーを含めて、これらのクラシック・レースを運営面から掌握していくが、これについては以下を参照のこと。鍵谷寛佑「19 世紀前半のイギリス近代競馬形成期におけるジョッキー・クラブとクラシック・レース」『歴史家協会年報』第 8 号、2013 年、6-16 頁。
- (36) *Racing Calendar*, Vol.29, 1802, pp.263-264.
- (37) *Ibid.* 2 つのシティ・オブ・チチェスターのプレート競走に勝利したのは、ブロック氏 (Mr. Bullock) 所有の鹿毛馬ジャイルズ (Giles) とラドブローック氏 (Mr. Ladbrooke) 所有の栗毛馬ミステリー (Mystery) であった。William H. Mason, *op.cit.*, p.185.
- (38) *Ibid.*, pp.185-186.
- (39) Robert Black, *Horse-Racing in England* (London, 1893), p.118.
- (40) *Racing Calendar*, Vol.64, 1837, p.104, pp.425-426.
- (41) Rosemary Baird, *op.cit.*, p.185.
- (42) *Racing Calendar*, Vol.41, 1814, p.282.
- (43) *Ibid.*
- (44) William H. Mason, *op.cit.*, p.191.
- (45) *Racing Calendar*, Vol.41, 1814, pp.206-369.
- (46) *Ibid.*, p.240.
- (47) *Racing Calendar* (*Races to Come*), Vol.75, 1847, pp.1-339. この年、アスコッ

トでは、「ゴールド・ベース (the gold Vase)」競走が行なわれたが、これを「ゴールド・カップ」とみなして計算に入れた。

- (48) William H. Mason, *op.cit.*, pp.185–198.
- (49) *Ibid.*, pp.185–213.
- (50) J. D. Parry, *An Historical and Descriptive Account of the Coast of Sussex* (London, 1833), p.421.
- (51) *Ibid.*
- (52) Christopher Hibbert (ed.), *Greville's England: Selections from the Diaries of Charles Greville, 1818–1860* (London, 1981), p.119. チャールズ・グレヴィルは、著名な日記作家としても知られている人物である。
- (53) C. F. Brown, *The Turf Expositor* (London, 1829), p.127.
- (54) *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.75, 1847, p.xvii.
- (55) Wray Vamplew, 'Reduced Horse Power: The Jockey Club and the Regulation of British Horseracing', *Entertainment Law*, Vol.2, No.3, 2003, p.96.
- (56) C. M. Prior, *The History of the Racing Calendar and Stud Book* (London, 1926), p.184.
- (57) *Ibid.*
- (58) *Racing Calendar*, Vol.74, 1846, p.lii.
- (59) *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.75, 1847, p.108.
- (60) *Ibid.*
- (61) Neil Wigglesworth, *The Evolution of English Sport* (London, 1996), p.35.
- (62) John Kent, *op.cit.*, p.53.
- (63) Rosemary Baird, *op.cit.*, p.187.
- (64) John Kent, *op.cit.*, pp.296–297. 「返し馬」とは、出走馬が競走前に行う準備運動のことである。
- (65) *The Illustrated London News*, Vol.1, No.12, 1843, p.184.
- (66) Mike Huggins, 'Lord Bentinck, the Jockey Club and Racing Morality in Mid-Nineteenth Century England: The 'Running Rein' Derby Revisited', *The International Journal of the History of Sport*, Vol.13, No.3, 1996, p.438.
- (67) Charles J. Archard, *The Portland Peerage Romance* (London, 1907), p.36.
- (68) John Kent, *op.cit.*, pp.60–61.
- (69) *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.75, 1847, p.108.
- (70) *Ibid.*
- (71) *Ibid.*, p.124.
- (72) *Racing Calendar*, Vol.29, 1802, p.263.
- (73) *Ibid.*

- (74) *Racing Calendar*, Vol.41, 1814, p.282. 加えて、この競走は、距離 1 マイル半 (2,400 m) で、5 名の登録がなければ不成立というものであった。*Racing Calendar* 発行の段階では、グッドウッド・カップにも登録していたジョン・コープ、エグレモント伯爵、ウィリアム・ロー、ウィリアム・ジョリフとチャールズ・ミットフォード (Charles Mitford) が登録していた。実際には 8 名の登録があり、エグレモント伯爵の鹿毛の牡馬ファン (Fun) が勝利を収めた。William H. Mason, *op.cit.*, p.191.
- (75) Mike Huggins, *op.cit.*, p.438.

——大学院文学研究科研究員——

The British Jockey Club and the Local Horse Racing in the Middle of the 19th Century : Lord George Bentinck's Reforms in the Goodwood Racecourse

By Kansuke KAGITANI

In Britain, horse racing has a very long history and is called “the Sport of Kings.” Although horse racing was formerly a monopoly of the upper class, all the classes including the middle class and the working class came to participate in the middle of the 19th century.

This paper takes the Goodwood racecourse in the middle of the 19th century. It is because horse racing experienced the fusion of an “aristocratic” element and a “modernistic” element at this time. And the racecourse, where various reforms were performed at the period by Lord George Bentinck, was the Goodwood racecourse. Therefore, it is very important to consider the Goodwood racecourse.

In this paper, the expansion of the influence of the Jockey Club is also considered at the same time. Because, people of the upper class who were supporters of horse racing management united a “modernistic” element with the “aristocratic” element, which horse racing originally has, and made horse racing a new stage. The Jockey Club, which was a social club of the upper class, organized horse racing in Britain. They had an especially large network.

In that case, I will take up the expansion of the social space by the members of the Jockey Club, the propagation to the local racecourses of the rules of the Jockey Club, the relationship during some races, and the growth of races seen to the change of the jockey's weight. As for historical records for solving these, I used the *Racing Calendar*.

In old research, the compatibility of the “aristocratic” element and a “modernistic” element of horse racing was not taken into consideration. In addition, I would like to also point out the function of the Goodwood racecourse as the model case of the Jockey Club. Therefore, this paper clarifies the horse racing image in the important time around the middle of the 19th century, and I expect to shed a new light on much existing horse racing research.